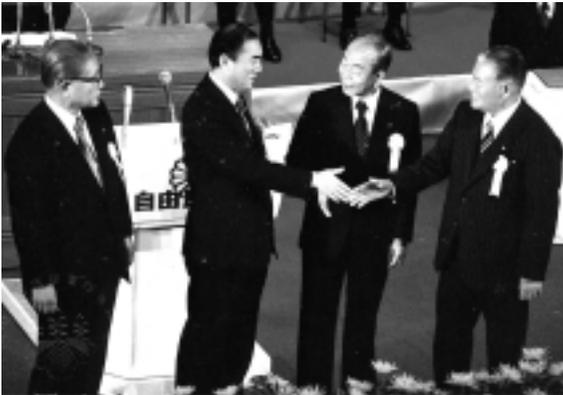


中曽根康弘氏（元内閣総理大臣）に聞く

理念をもった求道の政治家

―聞き手・山岸一平



第35回党臨時大会で第9代自民党総裁に選任された大平新総裁（右端）に握手する中曽根康弘総務会長（左から2人目）（日比谷公会堂で・1978年12月1日）

官房長官になってから大平さんを意識

——中曾根さんと大平さんは政治家同士ですから、いろんなことがあったと思います。大平さんは吉田茂・池田勇人両元首相の流れをくむ旧自由党系の人。これに対して中曾根さんは反吉田の立場にあった旧改進黨系の流れ。一九五五年の保守合同後は同じ自民党に属してはいても、近づいたり、離れたり、その関係は微妙だったのではないかと推察します。そういう政治的立場は別にして、まず人間・大平正芳について、どういう感想をおもちですか。

中曾根 新聞やテレビでも公にしたことですが、大平さんは求道者、道を求める求道者としての政治家。これは戦後の日本の政治家にはない非常に貴重な素質と、そういう精神、理念をもった政治家でした。そういうことを今でも確信しています。たしかに大平さんは、私は対岸で見えておって、こっちの岸で一緒にいたことはあまりないんです。しかし、求道者という点においては、私にもそういう素質に似たものがあつたと思います。私の場合は割合に正面に立つというか、悪くいえば自己顯示が強いという面があつたと思います。大平さんの場合は、むしろ黒衣であるとか、あるいはいろいろな段取りを下積みになってやっけていて、表には出ないという、そういう要素があつたと思うのですね。だけれども非常な教養人であつて、その上で固有の哲学をもつておつた。さらに非常に広い視野をもつておつたし、長期的なものの考え方をもつて、そういう目で物事を見ていましたね。それは間違いないと思います。

——政治家としての大平正芳を意識したのは、いつ頃からですか。

中曽根 彼が官房長官になった一九六〇年からですね。私は六〇年安保の直後、岸内閣の大臣（科学技術庁長官）を辞めて無役になった。まだ河野（一郎）派にいた頃だが、朝日新聞の三浦甲子二記者が、「お前、総理大臣になりたいか」と言うから「なりたい」と言った。そうしたら「あと一〇年、役に就くな」と言うから「ああ就かないよ」と言って、七年間、役に就かなかった。政務次官にもならないし、国会の委員長にもならなかった。政務次官にも委員長にもならないで総理大臣になったのは、私と福田（赳夫）さんだけです。その頃、三浦君が「大平氏と仲良くしろ」と私のところに来てきた。そして大平さんについて、彼からいろいろ説明を受けたことがありますね。無役だから南極へ行ったり、ロバート・ケネディ（米司法長官）を呼んだり、日の出山荘で畑仕事をやったり、そういうことをやっておった頃ですよ。

——大平さんが「寛容と忍耐」「低姿勢の政治」を打ち出し、官房長官として池田内閣の舞台回しをしていた時ですね。その頃の大平さんの印象は……。

中曽根 最初の頃の大平さんは、ほんとうに冴えない政治家でした。大平さんは官僚的序列の中の叩き上げなんです。池田さんの秘書官になったときから、宮澤さんと対比されながらの上がってきた。しかし、大平さんのほうが人間の幅が広くて、付き合いもよかったから、一般の評価はかなり高かった。もちろん、池田さんの信頼も厚かった。大平さんという人は、池田さんにとって気やすく使える人だったと思いますよ。

——中曽根さんとの接点は、はじめはあまりなかった……。

中曽根 ほとんどなかったですね。親密になったのは、彼が病気で倒れる少し前、内閣不信任で追

い詰められた頃からでした。

——接点はあまりないと言われますが、田中内閣では大平外相、中曽根通産相で、同じ内閣におられたわけですね。

田中内閣でのアラブ産油国との交渉

中曽根　そうです。七三年一〇月にオイル・ショックが起こります。私は通産大臣として、何とかアラブ産油国から友好国に指定してもらわないといけないと考えて、折よくサウジアラビアへ行くアラビア石油の水野惣平君（社長）にメッセージを持って行ってもらったのです。ファイサル国王は、日本がそんなにひどい状態にあると思っていなかったらしい。しかし、水野君は非常に信用があったから、「日本が（イスラエル支持でなく）親アラブ政策に転換するという内容の声明を出せば、友好国と認めて石油供給を増やしてやる」という了解をとって、向こうの官房長と協議した声明文を持って目白の私の家に飛び込んできた。私はその声明文を読んで、若干手直しをして田中総理に、「これは呑もう」と電話で伝えました。すると田中総理は「俺は賛成だが、大平を口説いてくれ」というわけです。

——それで……。

中曽根　それで大平さんに電話したら、彼は「検討する」というのです。それでその文書を外務省にも回して、翌日、商工委員会で石油需給二法の審議で一生懸命に答弁していると、外務省の鹿取泰衛官房長が、「ここをこう修正してくれ」と何度もやってくるので断った。それでも二度、三度とや

ってくるので、私も頭にきて、「そんな修正案を明日の閣議に出してみろ。みんなの前で破ってやる、と大平君にいえ」と怒鳴ってやったら、やっと承知しました。それが二階堂（進）官房長官の談話となり、サウジアラビアを中心としたアラブ諸国は、日本への石油の増量をきめたわけです。

——そのあと、田中内閣は金脈問題などが出て苦況におちいりますね。

中曽根 そう。先に三木（武夫）さんが辞め、福田さんが辞めるのを保利氏さんが抑えようとして抑えられないというので、保利さんが辞めて、そして福田さんが辞めました。そういうなかで、私と大平さんは絶対、田中君を守って行くという考えでしたが、結局、田中内閣は退陣に追い込まれるのですね。

——政界において、よく「田中 大平ライン」といわれて、大平さんと田中さんが非常に仲のよい政治家として協力し合ったことが知られています。この二人の性格や考え方はかなり違っていたと思うのですが、この関係について中曽根さんはどのように思われますか。

中曽根 私にもよく分からないところがあります。しかし、これは大平流の一つの処世術というか、政治技術をやっておったなという感じがします。大平さんという人は非常に風呂敷の大きい人だから、（田中）角さんを包み込んでやっておると。初めは池田内閣を守るために角さんを利用した。その後には角さんと共存し共生して行こうと、そういう共生と循環を考えていたんだらう思っていましたね。二人は性格などは合わないですよ、一種の政治技術ですよ。ただ、大平さんは非常に苦勞人だった。そういう点では角さんと一致したところがありましたよ。また大平さんは大蔵官僚出身ですが、官僚の臭さをあまり感じさせなかった人ですね。

——破れ鍋に綴じ蓋といつて、お互いがないものを持ち寄ったのではないかとも思います。どこを見ても合いませんよね。

中曾根 合わない。一種の政治技術ですよ。

——その意味では、フィロソフィーをもっている政治家、そういう点を考えると、中曾根さんなどと相容れるところがあるんですね。

中曾根 多分そうでしょう。

——そこで、田中内閣が退陣して、その後継をどうするかという協議が始まり、椎名裁定で三木政権が生まれますね。

椎名副総裁にきらわれた不用意な大平発言

中曾根 あの時は私は、自分自身が候補者であり、その上で候補者同士の話し合いの進行役をやったのです。仲裁役の椎名（悦三郎）副総裁は、福田、大平、三木、中曾根の四者で相談させようとしていたんじゃないかと思えます。そういう形をとって、ある程度、意見を言わせながら、そのトーンを見ようとしたんでしょう。要するに、熱意あるいは候補者同士の調和力、指導力、連携力、そういうものを確かめようとしたんだと思います。ところが、終わりの段階になって、「こんなにまとまらないのなら椎名が出馬する」という噂が出てきた。そこで大平さんが「驚いた。行司が禪をつけて出てきた」と新聞記者に不用意に発言した。それが知れわたって、大平さんは損をしたと思います。椎名さんも不愉快に思ったのではないでしょうが。

——それで椎名さんの裁定により、三木政権が生まれるわけですが、あの時には大平さんの可能性というのは、あったのでしょうか。

中曽根 大平さんの場合は、大平さんには、田中 大平という連携があつて、これは金脈一派だとみられる危険性がありました。椎名さんは、大平さんをそれほど評価していません。というのは（大平さんは）例の「あーうー」で、性格が一見したところ非常に晦渋でしょう。岸（信介）さんのように決断力をもつて、けじめをつけてピシピシやれる人ではない。

——椎名さんは、大平さんに対してあまり好意的ではなかった……。

中曽根 椎名さんという人は、長い間、行政を見てきたし、歴代の総理大臣を見ていて、目が肥えているわけですよ。だから大平さんに好感が持てなかった。それがまた大平さんに反映して、「行司が禪をつけて出てきた」という表現になつて跳ね返ってきたわけですよ。裁定の前日か前々日に出てきた。さっきも言ったように、あれは椎名さんにとっては不愉快だったでしょうね。三木さんに対しても（椎名さんは）「三木はバルカンド」ともよく言っていました。が、「三木指名」は残された究極の選択だったのかもしれない。

——椎名裁定で三木政権が生まれますが、生みの親の椎名さんも含めて、今度は「三木おろし」という運動が自民党内で起こり、三木内閣は任期満了選挙での敗北の責任をとつて総辞職する。そのあと福田内閣が誕生して、大平さんが幹事長になります。その時、いわゆる「大福密約」がささやかれましたね。

中曽根 あの時、たしか総裁の任期を三年から二年にしましたね。それから総裁を予備選で公選す

ること。それが密約説の根拠にもなつたわけですが……。あれは、拳党協であれだけの攻勢をやつて、福田さんと大平さんの間でそういう約束までできたから、福田内閣ができるのは、当たり前だと思ひました。ただ、いわゆるクリーン三木として格好のいいことをやつてきた三木さんを引きずり降ろしたからには、この内閣も長くは続かないだろうと思つていました。

総裁予備選を前に大平・中曽根会談

——福田内閣の終わり頃、つまり七八年一二月に総裁選予備選があり、福田さん、大平さん、中曽根さんに河本敏夫さんが立候補されますね。

中曽根 確かその年の夏の終わり、九月の初め頃だつたと思います。大平さんが会いたいというのでホテルオークラで、二人だけで会いました。大平さんは「立候補したい」といい、福田さんとの關係を綿々と話しましたね。福田さんは約束に反しているんだというわけです。「七月頃、福田さんは『自分を出ない。次は君に譲る』と言つてきた。また九月の始めにも、『自分は再選なんか考えていない』と言つてきた。ところが、その翌日になると『立候補する』と言い出した」と、あの人にはめずらしく、えらい怒つていました。「あんな不信義な態度をとる人は、はじめてだ。幹事長として一番の念願というか、ねらつてきたことは福田さんに選挙をやらせないことだつた。絶対に再選を阻止することが自分の命題だつた」と正直に言いましたね。

——大平さんが、そんなに怒つたのは、めずらしいケースですね。

中曽根 大平さんと非常に親しかつた大正製薬の上原小枝というおばあちゃんがいて、大平さんと

は親戚にあたり、私も親しくしていたんです。その人に福田さんは「次は大平だ。自分は再選しない」と何度も言っていたらしい。上原さんも憤慨していた。それで、大平さんは、何月何日にどういふことがあったと、福田さんとの関係を綿々と話し、「自分は立候補する」と言いました。あれは、私にも立候補してくれ、という意味だったのかも知れませんが、中曽根・福田連合でやられたら、かなわないと思ったのかも知れません。そのあたりは、はっきり分からなかったのですが、どうして私にこんな内輪話をするのかなと思いました。

——その時の大平さんの表情は……。

中曽根 例によって「あー、うー」ですよ。しかし、きわめて誠実に見えました。私を信頼しているんだ、と思いました。

——だから、自分を支持してくれ、という話では……。

中曽根 そういう話はなかった。ただ、福田さんとの関係で愚痴っぽい話を聞かされただけです。——そして七八年一月に総裁予備選が行われ、大平さんが勝って大平政権が生まれますよね。中曽根さんは三位だったですね。

中曽根 私は首相公選論者だから、もちろん予備選には賛成でしたよ。大平さんが勝ったあと、党の三役人事でゴタゴタしましたが、あれは予備選の尾を引いた福田派と大平派の喧嘩でしたね。福田さんのほうは、鈴木善幸幹事長というのは承知しなかった。「あれは田中の傀儡だ」と言って。それで斎藤邦吉君で妥協したわけですが、あの争いには、われわれはほとんど関心がなかった。その頃から、日本の政治に怨念というか恨みつらみが入ってきましたね。

実 — 大平内閣では、中曽根さんは役には就かなかったですね。

就 中曽根 あの時、「中曽根さん、何かやってくれないか」という話があったから、「幹事長なら華 いいよ。それがダメなら大蔵大臣かな」という程度に答えていたんです。私の代わりに桜内義雄君を去（のちに幹事長に）承認しました。

——一九七九年秋の総選挙で自民党が過半数割れをして、まあ保守系無所属を加えて何とか過半数を取ったのですが、それで四十日抗争が始まる。自民党の中から大平さんと福田さんという二人の首班指名候補が出て、たいへんなことになりましたが、あの方は中曽根さんは福田さんのほうに投票する。その辺の事情をお聞きしたいのですが……。

四十日抗争での三派連合の論理

中曽根 あの方は、福田派、中曽根派は、三木派と三派連携というのをやっていました。なんとか三木、福田と大平の関係の調和をとろう、調整しよう、そういう立場に私はありましたね。お二人は「大平は辞める」と言っておったんです。私はそれに対してね、すぐ辞めるというのは無理だろう。だから、辞めるというのはスローガンだろうけども、事実上は大平さんが少し謝って、そして調整をしたほうがいだろうという考えだった。大平さんにもそういうことを言ったことがあるのです。しかし、大平さんは、その点については非常に頑固でしたね。それで調整がうまくいかず、ああいう形になってしまったのです。私にとっては非常に不本意でしたね。

——それで首班指名選挙で総裁の大平さんではなくて、前総裁の福田さんを中曽根さんなどは投票したわけですね。その辺が三派連合で、やむを得なかったのですか。非常に大平さんは当時は憤慨していたわけですから……。

中曽根 まあそうですね。政治というものは時の勢いもあるし、選挙に負けたということが、あの時に非常に大きなファクターであった。負けるから解散するなど、われわれは言ってきたのに、それを敢てして負けた、その責任を取れという論理構成になったわけです。

——それから、あの時の総選挙の敗因の一つが、大平さんが言い出して、途中で引つ込めたんですけども、一般消費税の導入だったと言われていますが、その辺はどう思われますか。

中曽根 たしかに一般消費税については急に言い出した感がありましたね。それについて、われわれは非常に不愉快な気持ちを持ちました。われわれに了解もあまりしないで、選挙の途中で急に言い出して、また引つ込めるというのは見識がないと思っていましたね。一般消費税で負けたと、たしかに言われましたね。

——ただ、今になって見ると、あの時にあの段階で総理大臣が一般消費税の導入を言うというのは、勇氣ある発言であったと思われませんが……。

中曽根 そうそう。財政再建というのが、大蔵省出身の大平さんの頭の芯にはあったわけでしょうね。責任感というか。私の時に同じようなやっぱり消費税の前身の売上税の話をして、ぶったたかれたことがあります。それを竹下（登）君が後で引き受けてやったのと似たようなものです。総理大臣になると、どうしても国の前途に対して責任感をもつようになるんですよ。

実 — その四十日抗争が収まって約半年後の八年五月、福田、三木両派が本会議を欠席したため、野党の提出した大平内閣不信任案が通ってしまった。その時に中曽根さんは、福田さんや三木さんと袂を分かつて本会議場にお入りになり、不信任案に反対投票するわけですが、その辺の心理状況といふか背景は、どうということなのでしょうが。

大平内閣不信任案と憲政の常道論

中曽根 不信任案の採決の前、議員会館で三木さんと福田さんと私とで、不信任案にどう対応するかを話し合つたんです。私は、これは憲政の常道にもとづいて、本会議場に入つて不信任案に反対投票すべきだと主張したけれども、三木さんが頑強に反対し、福田さんがこれに同調した。その時に、われわれの仲間では中尾栄一君と稲葉修君があつて、ややそれに同調しかけた。中野四郎君が激しく出席すべきでないと言調しましたが、その時に私は時間が迫つたので大きな声を発して、「中尾君、稲葉君、われわれは本会議に出よう、さあ行く」と言つて本会議場に入つて行つた。それで、反対投票の一票を投じたんです。それを彼（大平さん）は非常に喜こんだらしい。最期の病床にあつて伊東正義君に「中曽根君があのととき入つてきた時ぐらいうれしいことはない。恩義は忘れないよ」と言つたということも伊東君から聞きました。野党の不信任案の攻勢に対しては、与党である限りは、総理を守らなければいけない。やっぱり憲政の常道論だね。与野党の戦いの中における憲政の常道といふのは、総理を守ること、そういう意識が（私には）ありましたね。

——大平さんが亡くなられた時は、中曽根さんは牧野隆守候補の応援で芦原温泉に行っておられて、そこに宇野宗佑行政管理庁長官から一報が入りまして、すぐ飛行機で帰られました。羽田空港からそのまま首相官邸に行かれました、伊東正義官房長官と二人だけで会われました。出てこられて中曽根さんは車に乗った瞬間に、「派閥を率いている人間しか分からないことがある」と言って、涙ぐんでいられたそうですね。あの時は、どういふようなお話が伊東さんとの間にあり、そういうふうな感じになったのでしょうか。

中曽根 それは、さつき申し上げた、彼は死ぬ前に非常に感謝していたという話をその時に初めて聞いてね、それで非常に感動したわけです。本当に惜しい人を失ったなど。その頃、前後の政治家を見渡した場合に、こういう求道心をもった見識のある政治家は日本に無くなっちゃったのか、そういう気持ちが非常にしたもんですからね。

——大平政権は一九七八年の一月から八年の六月まで、一年六カ月だったんですが、大平政治というものを、どのように見ておられますか。

中曽根 大平政治というのは、割合に国民に分かりにくかったと思います。やはり人間性とか思想・哲学というようなものは、側に居ないと分からない。私なんか、そういう点に興味をもっておったから、ある意味においては鋭い眼で見えていましたから、そういう理解をもっておった。しかし一般の人は、おそらくそういう面は全然、知ることができなかったと思います。それから、当時のような党争に明け暮れていては、総理としての実績をあげることはできませんよ。首相としての大平さんは苦惱の政治生活であったと思いますね。総理大臣というもので自分の政策を展開するとか、あるいは

総理大臣という役職をエンジョイするとか、そういう余裕はまったくなかった。そういう意味では、悲劇の政治家ともいわれているけれども、総理大臣に関しては、そうであったと思いますね。がしかし、側に居てよく付き合っていた新聞記者とか学者とか、あるいは一部の党员、議員の皆さんは、よく理解して非常に尊敬もしておった。そういうことがあったと思いますね。

——大平さんが政権をとってから、すぐに着手したのが政策研究グループをつくることで、学者、言論人、文化人、財界人、中堅官僚など当時の錚々たるメンバーを集めて、九つのプロジェクトをつくりました。結局、大平さんが生きているうちには三つの政策研究グループだけの結論しか出なくて、残りの六グループは大平さんが亡くなってから最終結論を出したんです。ところが、その研究成果は、大平内閣を引き継いだ鈴木内閣ではなくて、次の中曽根内閣の時にかなり実現していますね。また大平さんのブレーンを中曽根内閣の時に、またお使いになった。これは意識しておやりになったのですか。

大平・中曽根両内閣に共通するブレーション政治

中曽根 そのとおりです。私は総理になった時に、意識的に厳密に言えば、なるだろうと思われた時から、大平さんの時につくったあの政策はいい、あれはいただこうと言って佐藤誠三郎さん（東大教授）、劇団四季の浅利慶太さんらに「いただくよ」と宣言していた。そして、あの報告書を全部読んでみた。それで中曽根内閣ができてから、あの中でいるんなものを実際に採用したんです。例えば

環太平洋連帯構想とか教育の問題についてもありましたね。それから文化の時代とか、ああいうものもそうですね。大平さんのブレーンであった佐藤誠三郎、香山健一（学習院大教授）、公文俊平（東大教授）、浅利慶太氏らが私の参謀になった。それに、大平さんがやるうとした政策を実現しようと思いましたが、大平側近の伊東さんを政調会長にし、田中六助さんも重用しましたよ。

——政治家以外に各界から優秀な中堅の人材を集めて研究・報告させるといふ、いわゆるブレーン政治を積極的に採用したのは、戦後では大平内閣と中曽根内閣が目立っています。しかも、お二人のブレーンがかなりダブっているような気がしますが……。

中曽根 私の場合も意識的にブレーンを活用しました。一九六一年、安保騒動が終わった直後に『Making of the President Nineteen Sixty』（一九六〇年代、大統領をつくる方法）というセオドア・ホワイ特が書いた本を、私は渡辺恒雄、氏家斉一郎君その他の人と輪読会をやって、ケネディ・マシーンをつくって大統領になったのをよくトレースしてみた。あの時から中曽根マシーンをつくるうという意識があった。翌六二年に、私がロバート・ケネディを日本に呼んだのです。その時に歓迎委員会をつくった。そのヘッドは東京は小坂徳三郎君（信越化学社長）、大阪はたしかサントリーの佐治敬三さん（社長）だった。それにいろんな報道人や学者なども入れて、「ロバート・ケネディ歓迎委員会」をつくったわけで、この辺からいろいろ人脈ができてきたんです。

——どちらかと言えば、大平さんというのは田中（角栄）さんとの関係が強くて、中曽根さんとう関係の深い人ではなかったのですけれど、大平さんが亡くなった後、大平政治を一番そういう意味では実現しているというのは、中曽根政権だったんですよね。

実 中曾根 それは、やはり求道者という意味においてね、理念的にも一致したところがあったからで
就 すよ。彼はクリスチャンであって、そういう意味の求道者のな芯をもっておった。こっちは割に座禅
華 みたいなものであって、仏教的な芯をもっている。その点、似たものがあつたのです。いずれにして
去 も、最近では大平さんのように哲学をもつた政治家というのが少なくなりましたね。やっぱり日教組
の全盛時代、あるいは大学の時も全学連とか全共闘とか大学が荒廃していた時に卒業した連中ですか
ら、落ち着いて勉強する暇がなかつたんだらうと思います。要するに基礎学がない。残念なことす
ね。

(平成二十一年一月一日 中曾根事務所取材)

中曾根康弘(なかそね・やすひろ) 一九一八年、群馬県生まれ。東大法学
部卒後、内務省に入る。警視庁監察官をへて四七年衆議院議員に初当選、以後、
岸内閣の科学技術庁長官、佐藤内閣の運輸相、防衛庁長官、党総務会長、田中内
閣の通産相、科学技術庁長官、三木内閣の党幹事長、福田内閣の党総務会長、鈴木
木内閣の行政管理庁長官をへて、八二年に総理大臣に就任。新保守自由主義の立
場からリーダーシップを発揮し、八七年戦後三番目の長期政権を閉じる。当選一
九回の長老議員。著書に『新しい保守の論理』『政治と人生』『天地有情』『日本
人に言っておきたいこと』など。